

道徳授業の「落とし穴」⑥

～道徳授業の「あたりまえだけど大切なこと」～

土田 雄一



1. 「落とし穴」をふまえて授業を構成する

今回はこれまでの課題をもとに、道徳の授業構成のしかたについて、ポイントを明確にしたい。

2. 授業構成の「あたりまえだけど大切なこと」とは……

- ①「ねらい」を明確にする。
- ②「資料（教材）分析」をする。
- ③「中心発問」を明確にする。
- ④「話し合い」をどうするか。
- ⑤「終末」をどうするか。
- ⑥「板書」の構成を考える。

①「ねらい」を明確にする。

ねらいをふまえて、発問、話し合い等の授業構成を検討するのであるから、道徳授業に限らず、各教科の授業においても「あたりまえだけど大切なこと」である。よって、学習指導要領の内容項目をなぞるのではなく、「1時間の授業で達成するねらい」を明確にして設定する。

②「資料（教材）分析」をする。

使用する資料（教材）は、どのような構成になっているのか、どこで考えさせるのか、押さえておくべき点はどこか等を検討する。

また、子どもの視点に立って考えるためにも、「声に出して3回読む」ことをお勧めする。声に出して繰り返し読むことで、その内容やポイントがより明確になる。

③「中心発問」を明確にする。

中心発問は「開かれた発問」がよい。「主人公は、なぜ～したのだろう」「どうして主人公は～と考えたのだろう」等のように理由を問うものがよい。

「Aですか？ Bですか？」のように「二者択一型」の閉じられた問いもあるが、その際には「選択した理由」をあわせて聞くことがポイントとなる。この理由こそが道徳において最も大切な点であり、ねらいと深く関連するものである。

また、理由を聞くように意識すると「なぜそう

思ったの？」「もう少し詳しく教えて」等の問い返しができるようになる。

④「話し合い」をどうするか。

授業で挙手が多い場合、教師は1人を指名し、発表させる。それが終わると別の子に発表させる。3～4人に聞いて、教師が板書をする。実は、板書の間に「子ども同士のかかわりがない授業」は珍しくない。教師と子どもはかかわっているが、子ども同士で関連した発言がないのである。同様に、「グループで話し合いましょう」と教師が言った後、それぞれがワークシートに書いたことを発表し合って終わりという授業もあった。

これらは「話し合い」とは言えない。理由を聞いたり、類似点や相違点を確認したり、意見を聞きながら考えたことを発言したりすることが大切なのだ。自分と友達の意見を相互に関連させながら高め合うところに「話し合い」のよさがある。

⑤「終末」をどうするか。

若い教師から「終末をどうしたらよいか」と質問されることがよくある。「教師の説話」をどうするか悩むという。当然のことだが、学習のまとめ、ふり返りは子どもの言葉でまとめることもあるし、余韻を残して終わることもあろう。導入時の考えと比較して終わることもある。「教師の説話」は終末の手段の一つである。

⑥「板書」の構成を考える。

板書は何のためにあるのか。板書は、子どもたちが授業の中で資料（教材）を通して考え、学んだ貴重な足跡・記録である。この資料（教材）を活用して考えさせたいことを、どのようにしたら板書でわかりやすく伝えられるかを考えるべきである。板書は授業構成と深く関わっている。

3. おわりに

道徳授業改善の視点が、これまで連載してきた「道徳授業の『落とし穴』」である。「あたりまえだけど大切なこと」を意識することで授業が充実する。授業が変われば子どもも変わる。